
Summer memories

鳳凰院朱雀

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

Summer memories

【Zコード】

N2138A

【作者名】

鳳凰院朱雀

【あらすじ】

夏季、流璃、星那の三人の少女たちは夏休みにキャンプに行くことになった。キャンプに行つた先で、三人は美しいが、不思議な少女と出会い……。

始まり

1・始まり

三人の少女たちは今、あれこれと夏休みの計画を立てて居た。

「ねえ、夏休みどこ行こつか?
と、最初に言つたのは南川 みながわ 夏季。

この三人の中では気が強く、肩まである長い髪を、高い所で一つに束ねており、このグループの中の一人、睦月 むづき 流璃とほぼ毎日喧嘩をしている。

別に仲が悪いとか、そういう訳では無いのだが。

それにそんなに仲が悪いのなら、とつぐに二人は別々に行動して居るだろう。

「んなこと言われてもねー…………。別に特に行きたいとこがある訳でもないし…………。星那せいな、どうか行きたいトコある?」

「んー…………。今考え中…………」

星那こと水無月 星那は、流璃と夏季が喧嘩した時、いつも止めに入る宥め役だ。

彼女が居るからこそ、このグループは上手く行つて居ると言つても過言ではない。

「つーか、そういうアンタはどうなのさ?私たちにばつか聞いていいでアンタもどこに行きたいのか言いなさいよ」

流璃のこの一言が、喧嘩の火種になつた。

「…………ちょっと流璃?そーゆー言い方は無いんじゃない?!

(ああ もう)

星那は心の中で頭を抱えた。

「だつてこーゆー言い方しか出来ないんだからしちゃうがないでしょ

?」

「…………アンタのそういう所がかなりムカつくんですけど?」

「んなこと知らないわよ。つかうるさいんだけど?いい加減にして

くんない？」

「…………なんですか？ つか元はと言えどアンタのせいでしょう？ ！？」

「…………なんで私のせいなのよ？」

「だつてそうでしょーが！？」

ギヤーギヤーと騒ぐ夏季と流璃。

「一人とも～ もう止めなよ～ ねつ？」

星那のその一言に夏季と流璃の動きが止まる。

（良かつた 止めてくれて ）

と、星那が安心したのも束の間。

暫くしてまた二人は喧嘩を再開した。

とつとどどっちかが折れれば良いのに思われるだろうが夏季も琉璃も負けず嫌いなので、自分から折れる事は絶対にしない。

宥め役の星那がいないと、一日中ずっとでも喧嘩をしているだろう。しかも一回『止めなよ』と言つだけでは済まないので、二、三回注意をしないといけない。

「二人とも～！ もう止めな～！」

星那が怒鳴った。すると一人は今度こそ喧嘩を止めた。

「もう喧嘩しないでね？」

星那が言つた。

「それは絶対無理だね」

夏季と流璃が同時に言つた。

「…………だよね」

分かつてゐるのに何でこんな事を…………と星那は思い、心の中で自嘲した。

「…………まあそれは置いといて、本題に戻ろつか

夏季がそう言い、仕切り直す。

「さて、何処に行く？」

暫く沈黙が三人を包む。

10分ほど経つただろうか。不意に星那が沈黙を破つた。

「……一つだけ心当たりがあるんだけど……」

「そりなの？何処？」

夏季が身を乗り出して星那に聞く。

「うん。あのね、Y県のN湖なんだけど……三年くらい前かな……家族でそこに行つたんだ。それで、すっごく綺麗な所だつたから……また行こうつて言ってたんだ」

「へえ……。じゃあそこにする？」

その話を聞いて流璃が言つた。

「そうね。私も行つてみたい！」

夏季も楽しそうに言つた。

「じゃあそこにしようか」

この星那の言葉に一人も頷く。そして、そこに行くことが決まりたのだった。

夏季が身を乗り出して星那に聞く。

「うん。あのね、Y県のN湖なんだけど……三年くらい前かな……家族でそこに行つたんだ。それで、すっごく綺麗な所だつたから……また行こうつて言ってたんだ」

「へえ……。じゃあそこにする？」

その話を聞いて流璃が言つた。

「そうね。私も行つてみたい！」

夏季も楽しそうに言つた。

「じゃあそこにしようか」

この星那の言葉に一人も頷く。そして、そこに行くことが決まりたのだった。

2・出発

2・出発

美しい青空の下 駅の前に立つてゐる一人の少女が居た
流璃と星那である。一人はまだ来ない夏季を待つてゐた。
「つたくあの遅刻魔……。時間を守つた試しが無いんだから……」
「まあまあ。夏季にもいろいろ事情があるのかも知れないし……。
もつちよつと待つてみようよ」

「事情?どうせ寝坊して遅いんでしょ」

流璃は腕を組みながら冷ややかに言つた。

「そうかなあ?」

「そうよ。絶対そう」(決め付けるなよ……)

星那は心中で流璃に突つ込んだ。

「いつやー。ごめんごめん。すっかり寝坊して遅くなつちやつた
聞き覚えのある声で一人は顔を上げた。

目の前には全然慌てる様子の無い呑気な声でそう言つた遅刻常習犯
の夏季が立つて居た。

『ほら、やつぱり寝坊して遅刻して來たでしょ?私の言つ通り』

『うん』

「何一人でこそこそ小声で話してんの?」

「別に……」

流璃はぶっきらぼうに答えた。

(そーゆー態度取られると、すっごく気になるんだけどなあ……。
まあいつか)

夏季はそう思つた。

「……そんな事より早く行かないと間に合わないわよ

そつ言つうと、流璃はいきなり走り出した。

「えつあつーちよつと待つてよ流璃ー!」

星那も流璃の後に続く。

「一人とも足速過ぎつー私を置いてくなーつー」

夏季も慌てて走り出す。

「アンタの足が遅いだけよ」

容赦のない流璃の言葉。

「……悪かつたわねつーどうせこつちもべつよつー」

夏季が叫ぶ。

「一人とも走りながら喧嘩しないでよ…… 電車に乗り遅れちやうじゃんつ。」

「そうだつた…… 急がなきやつー」

『一番線、電車が発車します……。お乗りの方は……』

「さやーつー待つてえー！その電車ーつー！」

電車の扉が閉まる。

「……間に合つたー……。よかつたー……」

ほつと息をつく三人。

「……全く、アンタが遅いから……」

流璃がさも呆れたように溜め息をついた。

「……悪かつたわねつ

ふんつとそっぽを向く夏季。

「まあまあ もう許してあげたら？それには、電車の中だし……。周りの人に迷惑でしょ？」

星那が宥める。

「それもそうね……。もついいわ。許してやるわよ」

「そりやあどうも」

精一杯の皮肉を込めて夏季が言った。

「星那、目的地にはどれくらい掛かるの？」

「ん~と……2時間くらいかな」夏季の皮肉たっぷりの言葉を無視して、星那に尋ねる。

「ん~と……。一時間くらいだと想つ」

星那が答える。

「結構近いのね」

「やつだね」

一時間後、Y県に着き、電車から降りた。

「…………あーっ！ もー疲れたーっ！」

夏季が大声で叫んだ。

「煩いわねえ…………。疲れてんのはアンタだけじゃないのよ？ 私だって星那だって疲れてんだから」

鬱陶しそうに言う流璃。

「でもまだ歩くよー。頑張つてー」

星那は全く疲れていないらしい。

「…………誰が疲れてるって？」

夏季は隣にいる流璃を小突いた。

「…………」

流璃は黙り込んでしまった。

（何か言えよ…………）

夏季は黙り込んでしまった流璃を見て、そう思った。
さうして数時間後。

「…………ねえ、星那。ほんとにこの道で合つてんの？」

最初に口を開いたのは夏季だ。

「…………なんかさつきから同じトコでぐるぐる回ってる気がするんだ
けど…………」

続いて流璃が口を開く。

「…………」

星那はやつきから黙りこくれて居る。

「…………星那？」

心配した夏季が尋ねる。そしてやつと星那が重い口を開いた。

「…………迷つた、みたい…………」

「…………えつ？ 今なんて…………」

流璃と夏季は我が耳を疑つた。

「迷つたみたいって言つたの」

この星那の一言に二人は愕然とした。

「『迷った』って……。これからどーすんのー?」

夏季が焦つた様子で言つた。

「…………。『じいさん』って言われても……。」

夏季が叫ぶ。

「うるさいな！」

「コレが落ち着いてられるか～つつつ～！」

パニッケ状態の一歩。（特に夏季）

あの……

3・謎の少女

「えつ？」

澄んだ美しい声に夏季達は声のした方自分達の後ろを見た。

そこには大きな麦わら帽子を被り、袖なしのシンプルなワンピース（だと思う）を着た肩より長い艶やかな漆黒の髪をおろしている美しい少女が居た。

その風貌から、彼女は昔の女優のよう見える。

恐らく夏季たちより年上だな。

そう思わせる雰囲気が彼女にはあった。

夏季たちは暫くその少女に見惚れた。その少女は夏季たちに尋ねた。

「一体どうしたんですか？」んな所で……」

少女の問い掛けに、三人ははっと我に返る。

「……あつ。もしかして地元の人ですか？」

星那が尋ねる。

「ええ」

「……あの～。非つ常へ言へんんですけど……。実は……」

星那はかくかくしかじかと事情を説明する。

「やつか……。道に迷つちやつたのね」

「そ、うなんですか……。すみませんが道……、教えて頂けますか？」

「ええ。いいわよ」

「ほんとですか！？ ありがと、うわこます！ 助かります！」

「じゃあ着いて来て。案内するわ」

そう言つと、彼女は三人に着いて来るよつ促した。

夏季、流璃、星那は言われるままに少女に着いて行く。

「あそこよ」

少女は立ち止まり、そう言つと、前方を指差す。

その先には美しい湖が顔を出していた。

さらに先に進むと、水の清々しい匂いが鼻をくすぐった。四人は湖の近くに歩み寄った。

「…………や、やっと着いた…………」

荷物を置きながら、夏季は呟いた。

「そうだね よかった」

星那も疲れたよつに呟く。

「でも、本当にありがとうございました」

星那が本当に感謝を込めて少女に頭を下げながら言つた。

「いえいえ。役に立て良かつたわ」

少女が笑顔で答える。

「あの……、名前……、教えて頂けますか？私は水無月 星那と言つて、あの髪の短い子が睦月 流璃。髪を一つに結んでいるのが南川 夏季です」

星那は簡単に三人の自己紹介を済ませた。

「私は、鈴音。皐月 さつき 鈴音 すずねよ」

「またね」

鈴音はそう言つと、長い髪を揺らし、森の奥へと去つて行つた。

その夜。夏季、流璃、星那の三人はテントの中で他愛も無い会話に華を咲かせていた。

話している途中、夏季は不意に今日会つた美しい少女 鈴音の事を思い出した。

「ねえねえ、そういえばさあ、今日道を教えてくれた鈴音さんって、すつごく美人だったよねー」

「あつ、そうだね すつごく美人な人だったよね 私思わず見とれ

ちやつた

星那が言ひ。

「星那も？実は私も思わず見とれちやつたんだよね」

「……確かに、美人だつたわね」

流璃が言ひ。

「……へえ。流璃もそつ思つたんだ」

夏季がさも意外そつな視線を流璃に注ぎ、言ひた。

「……何よ？……意味？」

夏季の視線に、流璃は罰の悪そつな顔をした。

「だつて、流璃がそんに素直に他人の事褒めるなんて今まで無かつたじやん」

「……失礼ね。まるで私がいつも他人を見下してゐみたいに……。私だつて他人を褒める事ぐらいあるわよ」

「へえ、そうなんだ。ふーん」

夏季がにやにやしながら言ひ。そんな夏季の顔を見て、流璃は呆れてしまつた。

「……馬鹿らしい。んな事より早く寝なさいよ。明日も早いんだか

流璃は夏季と星那に背を向け、寝袋の中に入ってしまった。

(…………鈴音さんは本当に美人だつたけど、何故かしら？何となく、この世のものでは無いような、そんな不思議な感じを受けたのは)

流璃は寝袋の中でぼんやりそつと思つた。

(…………せつと、彼女が纏つていた涼やかな雰囲気のせいね)

流璃は今日出会つた昔の女優のような少女の事を思い出していた。そしてそのまま深い眠りにおちて行つた。

翌朝。

(…………もう朝か…………)

星那は、ふつと目が覚めた。

両脇には流璃と夏季がすやすやと規則正しい寝息を立てている。

(昨日、よっぽど疲れたんだらうなあ…………。まあしようがないか)

そう思い、寝袋から出、テントの外に出る。

キャンプの朝独特の、ひんやりとした空気が頬を撫でる。しばらく歩くと、星那は湖の側に人影を見つめた。

(…………誰だれ?こんなに朝早く…………)

星那はやつ思い、人影の近づく。

少し近寄ると、一人の少女が湖を無言で見つめていた。

艶やかな漆黒の長い髪

、鈴音だった。

(…………鈴音さん?)

星那は鈴音を見つめっこる。暫くして、鈴音が星那の方を向いた。

「…………あなたは昨日の…………」

鈴音は驚いたような顔をしてこる。

「お、お早うございます。お散歩ですか?」

星那はやつ言い、鈴音に歩み寄る。

「ええ。…………確か星那ちゃん、だつたわよね?」

鈴音は昨日と同じような袖なしのワンピースに大きな麦わら帽子を被つていた。

「はい。やつです」

星那が答える。

「星那ちゃんは、いそなに朝早く起つたの?」

「私も鈴音さんと同じです。早くに田が覚めちゃつて…………」

「そうなんだ。後の一人…………、夏季ちゃんと流璃ちゃんは？」

「まだ寝てます」

「そう。まだ早いものね」

そう言いつと、微笑んだ。

暫く鈴音と星那は楽しくお喋りをしていた。

そしていつの間にか、夏季と流璃も加わり、4人で談笑する。その中で鈴音の事が少し分かつた。

三人と同じ15歳である事。山の奥で一人で暮らしている事

。

「あ、ねえねえ、鈴音ちゃんも一緒に飯食べようよ」

夏季が唐突に言いつ。

「…………えつ？でもいいの？」

「うんつー全然いいよ ねつー一人ともー」

「うん」

「ええ。…………つつても今から作るんだけどね」

「…………本当？じゃあおじやましようかな？」

「うん そうと決まれば早速作ろいつー。」

「私も手伝つわ」

「ほんとっ！」めんね ありがとっ」

数分後

「出来たっ」

「そうだね おいしそう」

星那が嬉しそうに言ひや。

「じゃあ食べよっか」

朝食を食べながらまたもや四人は楽しくお喋りをした。

そんな感じで、四人は毎日のよつに語り合つた。日々は何事も無く過ぎて行つた。が。

ある事件が起つた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2138a/>

Summer memories

2010年10月28日08時34分発行